

200830017A

200830017B

厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業

エイズ対策研究事業の企画と評価に関する研究

平成20年度総括研究報告書

平成18-20年度総合研究報告書



研究代表者

木村 哲

東京通信病院 病院長



目 次

I. H20 総括研究報告書

エイズ対策研究事業の企画と評価に関する研究	1
研究代表者 木 村 哲（東京通信病院）	
（資料1）平成20年度研究計画ヒアリング会 プログラム	7
（資料2）エイズ対策研究に対する有識者の意見	10
（資料3）平成20年度研究成果発表会 プログラム	16
H20 研究成果刊行一覧表	19
刊行物	
1) エイズ対策研究事業研究成果抄録集	21
2) 医療保健施設での医療者主導による HIV 検査および カウンセリングに関するガイダンス	213

II. H18－20 総合研究報告書

エイズ対策研究事業の企画と評価に関する研究	335
研究代表者 木 村 哲（東京通信病院）	
（資料1）平成18年度研究計画ヒアリング会 プログラム	345
（資料2）平成19年度研究計画ヒアリング会 プログラム	348
（資料3）平成20年度研究計画ヒアリング会 プログラム	351
（資料4）エイズ対策研究に対する有識者の意見	354
（資料5）CDC 勧告に関連するアンケート調査用紙	361
（資料6）平成18年度研究成果発表会 プログラム	363
（資料7）平成19年度研究成果発表会 プログラム	366
（資料8）平成20年度研究成果発表会 プログラム	369
H18－20 研究成果刊行一覧表	372
a. 原著論文	375
b. 刊行物	
1) HIV/AIDS 25 年の変遷	439
2) 医療機関における成人・若年者・妊婦の HIV 検査に関する勧告改訂版	463
3) 医療保健施設での医療者主導による HIV 検査および カウンセリングに関するガイダンス	497

エイズ対策研究事業の企画と評価に関する研究

研究代表者 木 村 哲（東京通信病院 病院長）

研究要旨

本研究においては、エイズ対策研究事業が適正かつ円滑に実施されることを目的とし、厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業として我が国で必要とされる事業と研究の課題などにつき検討し、提案すると共に、現在、エイズ対策研究事業として行われている研究の評価の支援を行った。

本研究代表者は HIV 感染症とエイズの臨床と基礎研究の経験を活かし、事前評価委員会、中間・事後評価委員会の2委員会からなる専門委員会と常に連携し、また国内外の有識者の意見を聴取し、新規研究課題と組織の提案、研究費の配分額の調整に関する提案、および、研究成果の評価方法の在り方に関する提案を行った。エイズ研究の方向性については、我が国のみならず世界的視野から把握する必要がある、そのため研究課題の企画・立案に当たっては広く基礎的、臨床的、疫学的研究のみならず、社会医学的立場までふまえて検討した。そのために有識者や研究代表者との意見交換を活発に行い、新規研究課題立案の参考とした。

平成20年6月12日～13日にエイズ対策研究事業研究代表者会議（ヒアリング会）を開き、評価委員および各研究代表者間の意見交換を行い、各研究課題の相補性を高め、各研究班の研究の範囲と方向性を吟味し、エイズ対策研究事業の総合的発展を目指した。このヒアリング会において、新規課題については事前評価のコメント、また、継続課題については中間・事後評価のコメントに対し、研究代表者がどのように対応し、研究計画にどのように反映したかを発表するようにした点は、高く評価され有益であった。

エイズ対策研究事業による研究成果の評価に当っては中間・事後評価のため「研究成果発表会」を平成21年2月19日～20日の2日間にわたり開催・運営した。終了後、評価委員会を設営した。

昨年度、日本における HIV 抗体検査の在り方に対する考え方の見直しの準備として、米国 CDC が2006年9月に MMWR に出版した「Revised Recommendations for HIV Testing of Adults, Adolescents, and Pregnant Women in Health-Care Settings」（医療機関における成人・若者・妊婦の HIV 検査に関する勧告改訂版）（MMWR 55 (No. RR-14), 2006）を日本語に翻訳し、拠点病院、東京都内の300床以上の病院等に配布し、Provider-Initiated Testing and Counselling (PITC) に対する医師の意識調査を行った。今年度はその議論を深めるための材料として、2007年5月に発表された WHO/UNAIDS による Guidance on Provider-Initiated HIV Testing and Counselling in Health Facilities を日本語に翻訳し、拠点病院に配布した。

研究協力者

山本 暖子 (東京通信病院 経営管理課)

A. 研究目的

世界の HIV 感染者は現在までに 7,000 万人にも上ると言われており、医学的にも社会的にも大きな問題となっている。HIV 感染症とエイズを克服し、また新たな感染を防止することは医学研究者の使命である。このためには、基礎、臨床、更には社会医学の立場から幅広い分野において研究を行い、限られた研究リソースを有効に使い成果を挙げることが必要である。本研究は幅広い立場からエイズ対策研究のあり方と方向性を検討し、成果を評価し、エイズ対策研究事業が有効、適正かつ円滑に実施されるように支援することを目的とする。

個別研究課題に止まらず、研究事業の枠組と研究費配分が総合的に審議されるよう図ることで、我が国のエイズ対策全般の推進に寄与できる。そのことを通じ、拡大を続けている HIV 感染の広がりに歯止めがかかり、また感染者・患者の QOL が向上するものと思われる。

B. 研究方法

本主任研究者は HIV 感染症とエイズの臨床と基礎研究の専門家として、事前評価委員会、中間・事後評価委員会の 2 委員会からなる専門委員会と常に連携し、また国内外の有識者の意見を聴取し、新規研究課題と組織の提案、研究費の配分額の調整に関する提案、および、研究成果の評価方法の在り方に関する提案を行う。

また、年度の前半にエイズ対策研究事業研究代表者会議(ヒアリング会)を開催・運営し、評価委員と各研究代表者間、あるいは各研究代表者間の意見交換を行い各研究課題の相補性を高め、各研究班の研究の範囲と方向性を吟味し、エイズ対策研究事業の総合的発展を目指す。年度の終盤に研究成果発表会を開き評価委員による評価の場を設定する。

平成 20 年度は具体的研究活動として次の事項を実施する。

- 1) エイズ対策研究事業研究代表者会議(ヒアリング会)を開催する(平成 20 年 6 月 12 日～13 日)。
- 2) 国内の有識者からエイズ対策研究事業の今後の研究の方向性、およびその成果の評価方法に関する意見を収集・整理し、厚生労働省健康局疾病対策課に提案する。

- 3) 必要と考えられる新規課題などを厚生労働省健康局疾病対策課に提案する。
- 4) HIV 抗体検査に対する WHO/UNAIDS の PITC 実施方法に関するガイダンスを和訳し、医療関係者に配布し議論の素材とする。
- 5) 研究成果発表会を開催・運営し意見交換すると共に、成果評価の場とする(平成 21 年 2 月 19 日～20 日)。

倫理面への配慮

各研究計画が個人のプライバシーが保護される形で実施されるよう監視し、指導・支援する。

C. 研究結果

1) エイズ対策研究事業研究代表者会議(ヒアリング会)の開催

エイズ対策研究事業研究代表者会議(ヒアリング会)を平成 20 年 6 月 12 日～13 日の 2 日間にわたりエイズ対策研究事業の研究代表者と中間・事後評価委員の参加を得て、東京通信病院小講堂において開催した(資料 1)。

この会では今年 4 月に研究代表者にフィードバックされた事前評価委員および中間・事後評価委員のコメントに対し、研究代表者からその意見をどのように研究計画に反映させたかを聞き、また、取り入れることが困難なものについてはどのような事情によるのかについて、双方向的に意見交換を行った。更に、評価委員の意見と研究代表者の目指している研究の方向性に食い違いのある場合にも、率直な意見交換が行われ協議された。

評価委員にとっては、各研究代表者の考えを理解する良い機会となり、研究代表者にとっては研究班の意図、置かれた状況、研究者の思いを伝えることが出来、また、評価委員の真意が理解でき、有益であったと思われる。

2) 国内の有識者によるエイズ対策研究事業に関する意見の収集・整理

平成 20 年 9 月、事前、中間・事後評価委員、現在及び過去の研究代表者(主任研究者)経験者、NGO 代表者等にアンケート調査を行い、エイズ対策研究事業の今後の研究の方向性、およびその成果の評価方法に関する意見を収集した。得られた回答を要約すると以下の通りとなり、これを整理し厚生労働省健康局疾病対策課に提案した(資料 2)。

有識者の意見の概要**全体の枠組み等に関する意見**

- ① 基礎医学－臨床医学－社会医学の連携による研究が必要であるとの意見が複数あった。
- ② 基礎、臨床、社会医学研究の中で各柱を横断的、有機的にまとめる様な「研究班」あるいは「タイアップ体制」が必要である。
- ③ 特に、社会医学的研究が細分化され全体の方針や戦略が曖昧になっているので、研究の戦略を大局的に考える司令塔となる仕組みが必要であるとの指摘があった。
- ④ これに関連し、現在の研究課題数が多すぎるので整理・再編成し、大きめの班にまとめ、分担研究者に十分な研究費が配分できるようにした方がよいとの意見が、複数認められた。

- ⑤ 力を入れるべき分野としては、基礎研究、治療法開発に関する研究などが挙げられた。

基礎医学分野のテーマに関する意見

- ⑥ ワクチン開発の研究、HIVのウイルス学、宿主因子の研究、自然免疫の関与、血友病の遺伝子治療などが挙げられた。
- ⑦ ここでも基礎と臨床の結びついた研究が大切であるとの意見があった。

臨床医学分野のテーマ、検査・疫学分野のテーマに関する意見

- ⑧ 抗HIV療法の均てん化の推進、HAARTの副作用・薬物の相互作用の情報収集、変化している日和見感染症への対応が必要である。
- ⑨ 新たな検査法の検討、HIV疫学研究班などが必要である。

社会医学分野のテーマに関する意見

- ⑩ 小班の乱立を避けて事業の統廃合を進める、或いは統括する研究班を作るといった方向性の意見が多く認められた。
- ⑪ 風俗営業、在宅、外国人、施策の評価などのテーマが上がってきた。

研究成果の評価方法等に関する意見

- ⑫ 評価委員会に研究企画調整の機能も持たせ、実質的な推進課題の決定および研究担当者を調整する機能を果たせるように変更するのが良い。
- ⑬ 「企画と評価に関する研究班」に基礎研究、臨床研究、社会医学研究のサブグループを設けて、それぞれ責任を持って指導・評価をする体制を作ると良い。
- ⑭ 基礎医学系、臨床医学系、社会医学系に分けて、評価委員と共にその分野の研究代表者も発表を開

いて相互に評価点をつけるなどの方法が良い。

3) 新規課題に関する提案

上記の意見にあるように、枠組みとして小班の乱立を改善し目玉となるような、やや大きめの班を作ることが好ましいと思われる。今年度で終了する研究班が多いので、来年度は大幅に組み直すには丁度良いタイミングのように思われる。

具体的には今年度で終了する研究班のミッションも考慮し、次のような研究組織が必要ではないかと考えられた。

- ① HIV感染症・エイズの発生動向に基づいた効果的な予防対策に関する研究
疫学的研究の柱となる研究班(本原正博班を継承・拡大するイメージの研究班とする)。
- ② 各種個別施策層に対する予防・啓発手法の開発に関する研究
若者を含めた個別施策層に対する予防・啓発を包括・総括する研究班(従来の複数の班を包括する。社会医学分野の研究の柱とする)。
- ③ ワクチンおよび免疫強化療法の開発に関する研究
免疫療法関連の研究を包括(ワクチン開発に関する従来の複数の班を包括・統括する研究班とする)。
- ④ HIV感染症の新規治療薬および新規治療戦略の開発に関する研究
新規治療薬、新規治療法の研究(新しい治療戦略の研究・開発を含め、新しい班を立ち上げる)。
- ⑤ HIV感染症の検査・相談の推進法に関する研究
医療機関における検査の推進法の検討を含める。
- ⑥ HIV感染症の母子感染予防と母子の健康維持に関する研究
母子感染予防の推進、新生児、小児の健康管理(和田班を継承する研究班)。
- ⑦ HIVのウイルス学と分子疫学に関する研究
HIVの基礎研究と分子疫学(従来の複数の班を包括・統括するイメージの研究班とする。基礎研究の柱の1つとする)。
- ⑧ HAART時代における日和見合併症の制御に関する研究
日和見感染症と悪性腫瘍の予防と治療、疫学動向(従来の複数の班を包括・統括する研究班とする)。
- ⑨ 肝炎合併 HIV 感染症の治療戦略に関する研究
HBV、HCV 合併例の治療法の標準化など(小池班を継承・発展)。

⑩ 血友病の遺伝子治療の開発に関する研究
更に臨床応用に近づける必要がある。

⑪ エイズ対策研究事業の企画と評価に関する研究
基礎医学、臨床医学、社会医学の3分野から分担研究者を入れ、それぞれの分野の研究の在り方、方向性を企画、評価する班とするのが良いのではないか(木村班を継承)。

4) HIV 抗体検査に対する WHO/UNAIDS の PITC 実施方法に関するガイダンスの和訳

昨年度、日本における HIV 抗体検査の在り方に対する考え方を見直しの準備として、米国 CDC が 2006 年 9 月に MMWR に出版した「Revised Recommendations for HIV Testing of Adults, Adolescents, and Pregnant Women in Health-Care Settings」(医療機関における成人・若者・妊婦の HIV 検査に関する勧告改訂版)(MMWR 55 (No. RR-14), 2006)を日本語に翻訳し、拠点病院、東京都内の 300 床以上の病院等に配布し、Provider-Initiated Testing and Counselling (PITC)に対する医師の意識調査を行った。今年度はその議論を深めるための材料として、2007 年 5 月に発表された WHO/UNAIDS による Guidance on Provider-Initiated HIV Testing and Counselling in Health Facilities を日本語に翻訳し、拠点病院に配布した(研究成果刊行物 2)。

このガイダンスの中では HIV 感染症の状況を、流行レベルが低くリスク行動の高い人達の間でも 5%を超えない地域と、流行が一部の集団には認められる(5%超)が全体としては低流行状態(1%未満)にある地域、および一般住民の間で流行(1%超)している地域の3通りに分けられている。その上で流行の状況に応じた PITC の実施方法を推奨している。日本の MSM の間での HIV 感染率は 5%前後との数字が得られつつあり、第1もしくは第2の地域に該当する。このガイダンスによる PITC は opt-out 方式を基本としているが、対象となる集団が差別・偏見を受け易い、あるいは家庭内暴力の対象となり易いなど脆弱な場合は opt-in 方式も考慮すべきと記載されており、柔軟な対応が配慮されている。日本における検査の在り方を考える上で非常に参考になる。

5) 研究成果発表会を開催・運営

各研究班の中間・事後評価のため「研究成果発表会」を平成 21 年 2 月 19 日～20 日の 2 日間にわたり東京通信病院管理棟大講堂において開催・運営し

た。評価委員、各班の研究代表者および分担研究者、研究協力者など、延べ 129 名が集まり、両日合わせて 48 題の研究成果が発表され、評価委員および参加研究者との討議が行われた。当日のプログラムは参考資料 3 の通りである(抄録集は研究成果刊行物 1)。

尚、成果発表の終了後、中間・事後評価委員会及び次年度新規課題選考のための事前評価委員会を開催した(平成 21 年 2 月 20 日)。

D. 考察

エイズ対策研究事業による研究の方向性や内容について、評価委員と研究代表者が共通の認識を持ち、一体となって推進してゆくことが重要であることは論を待たない。この意味において、平成 20 年 6 月 12 日～13 日に開催したエイズ対策研究事業研究代表者会議(ヒアリング会)は相互理解を深めることに役立ち、大変有意義であったと思われる。

国内の有識者からエイズ対策研究事業の今後の研究の方向性、およびその成果の評価方法に関する意見を収集・整理し、提案した。広く基礎的、臨床的、疫学的研究のみならず、社会医学的立場までふまえて検討し、適切に行うことが出来たのではないかとと思われる。今後のエイズ対策研究の推進に少しでも役立つことになれば幸いである。

国内の有識者の意見を参考に今後エイズ対策研究事業として我が国で必要とされる研究課題のとりまとめを行い、候補として考えられる新規課題の例を提案できたことも意義深いと考える。

日本では HIV 抗体検査の普及率が低く、感染者の 8 割は検査を受けていないと推定されている。アメリカでは 75%が検査を受けているが、それでもまだ不十分と評価され、書面による承諾書を取るなど HIV の抗体検査を特別視する「例外論」が排除されることになった。HIV 感染症の多い国々で、この PITC を取り入れる国が増えている。HIV 感染症・エイズに関連した日本をとりまくこれらの国際的情況を広く認識し議論を深めるために、2007 年 5 月に発表された WHO/UNAIDS による PITC 実施方法に関するガイダンス Guidance on Provider-Initiated HIV Testing and Counselling in Health Facilities を日本語に翻訳し、拠点病院に配布した。昨年、当研究班で作成した CDC による「Revised Recommendations for HIV Testing of Adults, Adolescents, and Pregnant Women in Health-Care

Settings」(医療機関における成人・若者・妊婦の HIV 検査に関する勧告改訂版)(MMWR 55 (No. RR-14), 2006)の日本語訳と併せ活用することにより、日本でも抗体検査の在り方について議論が活発化することが期待される。

平成 21 年 2 月 19 日～20 日には研究成果発表会を開催・運営し意見交換すると共に、成果評価の場とした。6 月のヒアリング会同様、評価委員と研究代表者との相互理解を深め、研究成果の正しい評価に繋がり、大変有意義であったと思われる。研究成果発表終了後、直ちに評価委員会を開催し中間・事後評価を行い、引き続き事前評価委員会を開催した。時間的にはタイトなスケジュールであったが、発表の印象が薄れないうちに評価でき、有効であったと思われる。

E. 結論

本研究においては、厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業の適正かつ円滑な実施を図った。その目的のため年度の初めに「エイズ対策研究事業研究代表者会議」(ヒアリング会)を開催し、研究者間の情報・意見交換をし、評価委員との協議の場とすると共に、研究代表者間の研究内容等の調整の場とした。更に年度末に「研究成果発表会」を開催し、討論及び評価の場とした。エイズ対策研究事業の方向性ならびに新たな研究課題について検討し提案した。アメリカおよびその他の流行国で行われるようになった PITC に関連し、WHO/UNAIDS による Guidance on Provider-Initiated HIV Testing and Counselling in Health Facilities を日本語に翻訳し拠点病院に配布した。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

- (1) 木村哲；HIV 感染症を忘れていませんか(1), Medical Practice 25 (1):164, 2008
- (2) 木村哲；エイズ予防のための戦略研究, Confronting HIV 2008 33: 7-9, 2008
- (3) 木村哲；HIV 感染症を忘れていませんか, Medical Practice 25 (2): 339, 2008
- (4) 木村哲；病診連携—信頼される質の高い医療の提供に向けて, 下谷医師会 会誌 164: 10, 2008
- (5) 木村哲；医療の安全を思う, 通信医学 60(2): 65-67, 2008

- (6) 木村哲；改正感染症法と危機管理, 化学療法の領域 24(4): 19-21, 2008
- (7) 木村哲；感染症法の改正とエイズ予防指針の見直し, 化学療法の領域 24(4): 57-61, 2008
- (8) 木村哲；改正感染症法による感染症の類型と分類リスト, 化学療法の領域 24(4): 69-84, 2008
- (9) 木村哲；HIV 感染症, 薬剤師のための感染制御マニュアル 第 2 版, 薬事日報社, 東京: 81-86, 2008
- (10) 木村哲(編集)；抗菌薬の使い方 第 4 版, 第一三共株式会社, 東京, 2008
- (11) 木村哲；適正な抗菌薬の投与計画, 抗菌薬の使い方 第 4 版: 1-7, 2008
- (12) 木村哲(編集)；抗菌薬選択のポイント, 化学療法の領域 増刊号 24 S-1, 医薬ジャーナル社, 東京, 2008
- (13) 木村哲；序 —抗菌薬投与の基本—, 化学療法の領域 増刊号 24 S-1: 9-14, 2008
- (14) 木村哲, 岩本愛吉, 池上千壽子, 市川誠一, 菊池嘉, 鎌倉光宏；AIDS 情報 500 回記念座談会 エイズ対策の推進に向けて, 週刊保健衛生ニュース 1456-1: 1-24, 2008
- (15) 木村哲；自分と周りの人達のために, エイズリポート 80: 1, 2008
- (16) 木村哲；HIV 感染症「治療の手引き」, GSK ファーマシストジャーナル 6(3):7-9, 2008
- (17) 木村哲；HIV 感染症に対する新戦略 序 —進化を重ねる HAART—, 化学療法の領域 25 (2): 22-25, 2009
- (18) 木村哲, 岡慎一, 味澤篤, 杉浦互；座談会 抗 HIV 療法の諸問題と HIV インテグラーゼ阻害薬の役割について, 化学療法の領域 25 (2): 89-96, 2009
- (19) 木村哲；第 17 回国際エイズ会議 Mexico City 2008, Confronting HIV 2009, 35: 11, 2009
- (20) 木村哲；HIV 感染症「治療の手引き」<第 12 版>, Confronting HIV 2009, 35: 12-13, 2009

2. 学会発表

- (1) 木村哲；アルトマーク賞受賞講演 共に生きて 22 年, 第 22 回 日本エイズ学会 2008.11.26(大阪)
- (2) 木村哲；イブニングセミナー HIV 感染症「治療の手引き」第 12 版改定ポイント, 第 22 回 日本エイズ学会 2008.11.26(大阪)
- (3) 木村哲；シンポジウム 11 日本のエイズ対策はどこへ向かうのか? 日本のエイズ対策を評価する—予防指針見直しの視点から—, 第 22 回 日本エイズ学会 2008.11.27(大阪)
- (4) 木村哲；教育講演 HIV 感染症の治療と予防—過去から未来へ—, 第 22 回 日本エイズ学会 2008.11.27(大阪)

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業
平成 20 年度 研究計画ヒアリング会
プログラム

日時) 1 日目 平成 20 年 6 月 12 日(木) 9:30-16:40

2 日目 平成 20 年 6 月 13 日(金) 9:30-12:13

場所) アルカディア市ヶ谷 (私学会館) 4 階「鳳凰」

東京都千代田区九段北 4-2-25

電話:03(3261)9921

エイズ対策研究事業の企画と評価に関する研究

研究代表者:木村 哲

事務局:〒102-8798 東京都千代田区富士見 2-14-23

東京逋信病院 病院長室 山本暖子

TEL: 03-5214-7000 FAX:03-5214-7600

E-mail: hayamamoto@tth-japanpost.jp

平成 20 年度 エイズ対策研究事業 研究計画ヒアリング会
プログラム

1 日目 6 月 12 日(木)

9:30- 9:45 挨拶 倉田毅、木村哲、厚生労働省健康局疾病対策課

	研究代表者名	課 題 名	研究期間
(1)	9:45- 9:57 小池 創一	UNGASS REPORT 等の報告書作成に必要な情報を収集・分析する研究	20-21
(2)	9:57-10:09 山本 太郎	先進諸国を中心とした海外におけるエイズ発生動向、調査体制、対策の分析	19-21
(3)	10:09-10:21 武部 豊	アジア・太平洋地域における HIV・エイズの流行・対策状況と日本への波及に関する研究	18-20
(4)	10:21-10:33 木原 正博	HIV 感染症の動向と影響及び政策のモニタリングに関する研究	18-20
(5)	10:33-10:45 山本 直樹	HIV の感染予防に関する研究	18-20
(6)	10:45-10:53 袴田 航	抗エイズ薬を目標としたウイルス糖鎖構造制御による宿主免疫の賦活化・機能化分子の開発	18-20
(7)	10:53-11:01 小林 直樹	HIV 感染モデルマウスの樹立および HIV 特異的細胞傷害性 T 細胞によるエイズ発症遅延機序の解析	20-22
(8)	11:01-11:09 吉岡 靖雄	HIV に対する粘膜ワクチンの最適化に適う安全性・有効性に優れた粘膜ワクチンアジュバントの開発	19-21
(9)	11:09-11:21 廣井 隆親	HIV 感染予防における経粘膜ワクチンの開発	18-20
(10)	11:21-11:33 滝口 雅文	HIV 感染症の治療開発に関する研究	18-20
(11)	11:33-11:41 張 陵峰	HIV-1 感染のヒートラット種間バリエーションの解明	19-21
(12)	11:41-11:53 佐多 徹太郎	HIV 感染とエイズ発症の阻止および治療に関わる基礎研究	18-20
(13)	11:53-12:01 野村 涉	エイズ感染細胞での配列特異的遺伝子組み換えによる効率的な HIV 遺伝子除去法の開発	20-22
	12:01-12:40 昼 食		
(14)	12:40-12:48 駒野 淳	電算機的アプローチを活用した RNaseH 活性を標的とする HIV-1 複製阻害剤開発に関する研究	18-20
(15)	12:48-13:00 杉浦 五	薬剤耐性 HIV の動向把握のための調査体制確立及びその対策に関する研究	19-21
(16)	13:00-13:12 佐藤 裕徳	薬剤耐性 HIV の発生機序とその制御方法に関する研究	19-21
(17)	13:12-13:20 川下 理人	多剤耐性 HIV における将来的な変異・構造予測と新規抗 HIV 薬開発	19-21
(18)	13:20-13:32 高折 晃史	Vif/APOBEC3G の相互作用を標的とした新規抗 HIV-1 薬の開発	20-22
(19)	13:32-13:40 武田 哲	抗ウイルス作用をもつ宿主防御因子 APOBEC3G と HIV-1 Vif との結合領域および特性の解明と、その阻害化合物の探索	19-21
(20)	13:40-13:52 市川 誠一	男性同性間の HIV 感染対策とその介入効果に関する研究	20-22
(21)	13:52-14:00 嶋田 泰司	同性愛者等への有効な予防介入プログラムの普及に関する研究	18-20
(22)	14:00-14:08 加藤 慶	沖縄県における男性同性愛者への HIV 感染予防介入に関する研究	20-22
(23)	14:08-14:20 東 優子	日本の性産業施設・産業に係わる人々への支援・予防対策の開発に関する学際的研究	18-20
(24)	14:20-14:32 木原 雅子	若年者等における HIV 感染症の性感染症予防に関する学際的研究	18-20
(25)	14:32-14:40 日高 康晴	インターネット利用層への行動科学的 HIV 予防介入とモニタリングに関する研究	20-22
(26)	14:40-14:52 生島 嗣	地域における HIV 陽性者等支援のための研究	20-22
(27)	14:52-15:04 山中 京子	中核拠点病院において行われるカウンセリングの質を向上させる研究	20-21
(28)	15:04-15:16 仲尾 唯治	個別施策層に対する HIV 感染予防対策とその介入効果の評価に関する研究	19-21
(29)	15:16-15:28 服部 健司	HIV 感染予防個別施策層における予防情報アクセスに関する研究	20-22
(30)	15:28-15:40 濱口 元洋	HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究	20-21
(31)	15:40-15:52 菊池 嘉	HIV 診療支援ネットワークを活用した診療連携の利活用に関する研究	20-22
(32)	15:52-16:04 金田 次弘	末梢 CD4 陽性 T リンパ球中の残存プロウイルス量とその活動指数は治療中断の指標となりうるかを明らかにする研究	18-20
(33)	16:04-16:16 五十嵐 樹彦	エイズ多剤併用療法中のリザーバーの特定および選択的障害に関する研究	20-22
(34)	16:16-16:28 安岡 彰	重篤な日和見感染症の早期発見と最適治療に関する研究	18-20
(35)	16:28-16:40 中川 正法	NeuroAIDS の発症病態と治療法の開発を目標とした長期フォローアップ体制の構築	18-20

平成 20 年度 エイズ対策研究事業 研究計画ヒアリング会 プログラム

2 日目 6 月 13 日(金)

9:30- 9:45 挨拶 倉田毅、木村哲、厚生労働省健康局疾病対策課

	研究代表者名	課 題 名	研究期間
(36)	9:45- 9:53 高島 康弘	免疫不全に伴う脳内潜伏トキソプラズマ原虫再活性化の事前予想と再活性化原発局所における宿主遺伝子発現レベルの網羅的解析	18-20
(37)	9:53-10:05 岡田 誠治	HAART 時代の長期予後を経かす治療抵抗性エイズリンパ腫に対する多面的治療戦略開発に関する研究	19-21
(38)	10:05-10:17 小池 和彦	HIV 感染症に合併する各種疾病に関する研究	18-20
(39)	10:17-10:29 坂田 洋一	血友病の治療とその合併症の克服に関する研究	18-20
(40)	10:29-10:41 白阪 琢磨	服薬アドヒアランスの向上・維持に関する研究	18-20
(41)	10:41-10:53 白阪 琢磨	自立困難な HIV 陽性者のケア・医療に関する研究	19-21
(42)	10:53-11:05 田邊 嘉也	HAART の長期的副作用対策・長期予後に関する研究	19-21
(43)	11:05-11:17 湯永 博之	抗 HIV 薬の適正使用と効果・毒性に関する基礎的研究	20-22
(44)	11:17-11:29 秋田 定伯	HIV 関連 Lipodystrophy の克服に向けて	20-22
(45)	11:29-11:41 佐藤 岳哉	AZT 誘発ミトコンドリア機能障害に対する分子治療方法の開発	19-21
(46)	11:41-11:49 渡邊 大	標準的治療法の確立を目指した急性 HIV 感染症の病態解析	20-22
(47)	11:49-12:01 和田 裕一	周産期・小児・生殖医療における HIV 感染対策に関する集学的研究	18-20
(48)	12:01-12:13 今井 光信	HIV 検査相談機会の拡大と質の充実に関する研究	18-20

※ 一般・指定研究 発表時間 9分、質疑応答 3分

※ 若手研究 発表時間 6分、質疑応答 2分

エイズ対策研究に対する有識者の意見

取りまとめ 平成20年10月17日

エイズ対策研究事業の企画と評価に関する研究班

研究代表者 木村 哲

(東京通信病院)

1. 全体の枠組み等に関する意見

- ・ わが国では基礎、基礎—臨床をつなぐ部分の研究への研究費の投入があまりにも少ない。臨床での成果を有効たらしめるためにはもっとこの分野の研究を推進させる必要がある。
- ・ 各領域の分野の研究班ばかりで、基礎医学—臨床医学—社会医学の連携による研究、横断的な研究班が存在しない。
- ・ 単発的研究を束ねるような従来の研究班体制ではなく、基礎、臨床、社会医学研究の中で各柱横断的な、より一層のタイアップ体制が求められる（共同研究体制の構築）。
- ・ 当初、HIV の社会医学的研究は疫学・検査・予防関係が1つの研究班（HIV 疫学研究班）に1本化されていたが、2000 年からは徐々に細分化され、現在は15の研究班に分かれていて、社会医学的研究全体の方針や戦略が曖昧になっている感がある。研究の戦略を大局的に考える司令塔となる仕組みを設ける必要がある。
- ・ エイズの治療法開発に関する研究が、全体として数が少ない。厚生労働省の科学研究費としてはこの分野の数を増やし、全体としてバランスを取ることが重要ではないか。
- ・ 実際の施策の立案に応用される可能性を持った operational research を強化すべきである。
- ・ 基礎医学の分野（分子生物学的分野）も増やしたら良いのではないか。
- ・ 基礎研究は縮小する傾向にあるようだが、HIV-1 の病態解明、新規治療法の開発は、充実した基礎研究の基づくものである。
- ・ 基礎的研究が治療、診断、対策の根本である。文部科学省からのエイズ研究に対する組織的なサポートがますます先細りとなりつつある中、エイズ対策研究事業の役割は極めて重大である。
- ・ 現在の課題数は多すぎるのではないか。一定額以上の研究費の確保や集中的な研究の促進のため、ある程度の整理が必要と考える。
- ・ エイズ対策研究事業の研究課題は、基礎医学（18 題）、臨床医学（18 題）、社会医学（12 題）、の3つの柱にほぼ均等に分布する（疫学研究は基礎医学研究に含めた）が、課題数（計 48 課題）は多すぎる。個々の研究費が減少し、事業の焦点が不明

瞭となり、重要課題を組織的に研究することが難しくなる。各柱で 10 課題程度に整理すべきであると考える。

- ・ 48 課題が列挙されており課題数が多いことが目立ち、研究事業の重点のメリハリがわからない。『基幹研究事業』、『緊急性や政策的に特に焦点を絞って行うべき研究事業』『若手育成研究事業』等に研究の大枠を決めるべきだと思う。その上で、分担研究者あたりの研究費を少なくとも 500 万円以上、可能な限り 1,000 万円程度を確保することを目標とする。
- ・ 研究課題の整理は効率的、効果的研究の目的として重要で、特に基礎研究では研究への集中を促進するために分担者への研究費を最低 600 万、通常は 1000 万とする。

2. 基礎医学分野のテーマに関する意見

- ・ HIV に対するヒトの免疫学研究分野はエイズワクチン開発のため重要な研究。米国ではこの分野に既に多額の研究費を投入しており、ワクチン・治療法開発に重要である。
- ・ 国際協力研究も視野に入れた HIV-1 ワクチン作製は、やはり、最も力を入れるべき領域であろうと考える。
- ・ HIV のウイルス学研究では HIV の構造、複製、進化、HIV 感染に対する免疫応答、病原性、疫学の 6 課題が挙げられる。平成 20 年度以降に終了する基礎医学系の課題について、順次、上の 6 課題に整理・集約していく案が考えられる。
- ・ 前臨床段階の研究、臨床と基礎研究をつなぐ動物モデルを用いた予防・治療に関する研究を強化すべきと考える。臨床研究に関わる人達と動物モデルを用いて研究する人達の緊密な連携がとれる研究班があると良い。
- ・ 宿主（細胞が有する自然免疫と microRNA）とウイルスの微妙な関係を明らかにする事は将来の臨床にもつながる重要なポイントと考える。
- ・ HIV/AIDS の複製に関与する宿主因子が複数見出されているが、これらの宿主因子が臨床病態とどの様に結びつくかについて取り組む研究班が必要である。基礎的研究、臨床研究、両者混在した形で一つの班として構築する。
- ・ 近年世界的に注目されている宿主因子研究の充実が必要と考える。
- ・ 自然免疫の役割
- ・ 自然免疫の研究や中和抗体の研究
- ・ recombinant ウイルスの理解（発生機序、広がり）
- ・ HIV 潜伏感染のメカニズムと感染細胞排除のための研究
- ・ 新たな治療標的の探索と低分子化合物の開発研究
- ・ 感染予防および治療ワクチンの開発
- ・ HIV の持続感染機構
- ・ バイオインフォマティクスの HIV 感染症研究への応用

- ・ 血友病患者さんに何とか安全で有効な遺伝子治療を開発する研究。

3. 臨床医学分野のテーマに関する意見

- ・ 人種差なども考慮した薬剤相互作用、副作用を積極的に検討し、結果を検索できるようにする研究班
- ・ HAART の登場により変化する日和見感染症に対する対応戦略
- ・ HIV 感染長期化に伴う悪性腫瘍への対処
- ・ 病院での HIV 検査の推進法に関する研究
- ・ 地域での HIV 診療の均てん化に関する研究
- ・ 抗 HIV 療法治療開始時期と患者予後に関する研究
- ・ HIV 感染に関わる病態の研究

4. 検査・疫学分野のテーマに関する意見

- ・ Recent Infection(最近6ヶ月以内)の罹患情報をもたらす BED-CEIA、CD4 count 等の血清学的方法のルーティン化に関する研究
- ・ 16 重点都道府県における HIV 診療適正規模の推定と将来予測
- ・ 新たな検査法や HIV 検査相談のあり方の開発も含め、保健所等の HIV 検査相談体制の充実を計ると共に、それら検査相談の効果的な広報あり方や、それら HIV 検査相談に関わる関係者の質を高めるための研究等 HIV 検査相談の充実に関する総合的研究
- ・ 日本の HIV/AIDS の発生動向の将来推計
- ・ 日本の HIV 感染症に関する疫学研究
- ・ HIV 検査受検者への予防介入に関する研究

5. 社会医学分野のテーマに関する意見

- ・ 患者数が一向に減少しないのは社会・疫学研究がこれまで有機的かつ効果的に推進されてこなかったことに一因があるのではないのか？具体的に事業目標を数字で示すように指導すべきではないだろうか？
- ・ 小班的な乱立を避けて、事業の統廃合を進めるのも一案であろう。
- ・ 日本人疫学研究事業と薬剤耐性事業は統一して、薬剤耐性／疫学班として一本化することが好ましいのではないか。また、核酸配列はデータベースとして可能な限りオープン化する事が基礎研究班との研究連携促進に有意義であろう。
- ・ 社会医学系の研究を統括する研究班が必要である。現在は各研究班の成果がそれぞればらばらに社会に還元されている。
- ・ 文言として「性風俗」「セックスワーク」が盛り込まれた課題名の存在が必要である。「性風俗産業の従事者及び利用者」が研究課題として取り上げられていること

は、日本のエイズ予防指針の具体的な取り組み姿勢を示す上で、重要な意味を持つ。

- ・ 今後の流行のスコープと流行抑制に必要な対策のスコープに沿って体系的でバランスのとれた研究体制を構築すること（予防研究の強化を含む）。国家規模で予防を推進している研究が大きく研究費を削減され、単なるアンケートや調べ物の研究にかなり大きな研究費が行っているように見える。
- ・ 福祉施設、在宅看護などの領域での HIV 陽性者の受入れの促進に関する研究
- ・ 滞日外国人の HIV/AIDS 発生が減少しない原因とその対策に関する研究
- ・ 自治体の HIV/AIDS 対策の構築と評価に関する研究
- ・ 対策効果指標による対策評価

6. 研究成果の評価方法等に関する意見

- ・ 研究評価委員会がエイズ対策研究を大きく推進する機能を有するように変更することは、わが国のエイズ患者や感染者を減らす意味で大きなポイントとなる。即ち、厚労省の行うエイズ対策研究であることを明確に打ち出すべきであることから、研究評価委員会に研究企画調整の機能も持たせ、実質的な推進課題の決定および研究担当者を調整する機能を果たせるように変更する。
- ・ 研究成果発表会に評価委員全員が参加しているわけではなく、研究成果の評価は研究成果抄録と継続研究申請書により行われている感がある。全体で討議することも大切であるが、基礎医学系、臨床医学系、社会医学系に分けて、評価委員と共にその分野の研究代表者も発表を開いて相互に評価点をつけるなどの方法はどうか。
- ・ 社会医学研究をよりよく企画・評価できる体制を整えること。できれば、現役の研究者を含めて、研究の戦略を考える枠組みを組織すると良いのではないか。
- ・ 現在の「企画と評価に関する研究班」に基礎研究、臨床研究、社会医学研究の評価をするサブグループを設けて、それぞれ責任を持って指導する体制を作ると良いのではないか。

7. その他

- ・ リサーチレジデント等若手研究者育成に関して；エイズウイルスを実際に使用する研究は、特定の研究施設で専門的トレーニングを受けた人材が行うものであり、とくに人材確保が困難な部分。エイズ予防財団のリサーチレジデント制度は貴重であるが、雇用が年度の中途採用となるほか、実質2年半程度の雇用の後離職せざるを得ないという制約は、エイズ対策事業の基礎的研究を著しく非効率化しており、改善を要求したい。他の研究（たとえばがん研究等）とはかなり異なる現状がある。

ご意見のまとめ

先ず、全体の枠組み等に関する意見では、

- 1) 基礎医学－臨床医学－社会医学の連携による研究の必要性について幾つかの意見がありました。
- 2) また、基礎、臨床、社会医学研究の中で各柱を横断的、有機的にまとめる様な「研究班」あるいは「タイアップ体制」が求められました。
- 3) 特に、社会医学的研究が細分化され全体の方針や戦略が曖昧になっているので、研究の戦略を大局的に考える司令塔となる仕組みが必要であるとの指摘がありました。
- 4) これに関連し、現在の研究課題数が多すぎるので整理・再編成し、大きめの班にまとめ、分担研究者に十分な研究費が配分できるようにした方が良いとの意見が、複数認められました。
- 5) 力を入れるべき分野としては、基礎研究、治療法開発に関する研究などが挙げられた。

基礎医学分野のテーマに関する意見では

- 6) ワクチン開発の研究、HIV のウイルス学、宿主因子の研究、自然免疫の関与、血友病の遺伝子治療などが挙げられ、
- 7) ここでも基礎と臨床の結びついた研究が大切であるとの意見がありました。

臨床医学分野のテーマ、検査・疫学分野のテーマに関する意見では

- 8) 抗 HIV 療法の均てん化の推進、HAART の副作用・薬物の相互作用の情報収集、変化している日和見感染症への対応、
- 9) 新たな検査法の検討、HIV 疫学研究班などのテーマが上がって参りました。

社会医学分野のテーマに関する意見では

- 10) 小班の乱立を避けて事業の統廃合を進める、或いは統括する研究班を作ると言った方向性の意見が多く、
- 11) その他、風俗営業、在宅、外国人、施策の評価などのテーマが上がって参りました。

研究成果の評価方法等に関する意見では

- 12) 評価委員会に研究企画調整の機能も持たせ、実質的な推進課題の決定および研究担当者を調整する機能を果たせるように変更するのが良い、あるいは、
- 13) 「企画と評価に関する研究班」に基礎研究、臨床研究、社会医学研究のサブグループを設けて、それぞれ責任を持って指導・評価をする体制を作ると良い。
- 14) 基礎医学系、臨床医学系、社会医学系に分けて、評価委員と共にその分野の研究代表者も発表を聞いて相互に評価点をつけるなどの方法が良いなどの意見があった。

提 案

公募する課題名は別途考えることとして、枠組みとして、多くの意見に有りましたように、小班の乱立を改善し目玉となるような、やや大きめの班を作ることを考えてみては如何でしょうか。

今年度で終了する研究班が多いので、来年度は大幅に組み直すには丁度良いタイミングのように思われます。

研究成果の評価方法等に関しては以前から、評価が基礎医学的視点に偏っている、社会医学系の仕事を理解できる評価委員が少ない、事業的要素の強い研究班は行政で出来ないところを苦勞して補っているのに評価は論文重視で報いられない、同じメンバーで3分野を評価するには無理があるなどの批判・不満が鬱積していますが、今回、基礎研究、臨床研究、社会医学研究の3分野に分け、評価委員と共にその分野の主任研究者加わった形の評価方法も提案されました。これは評価委員の人材不足、評価の偏りを是正しようとの考えから出たものと思われます。

研究者自身が評価に加わる事は、自己の評価に加わらないにしても、弁護的になったり、他の班を意図的に落としたり上げたり出来る弊害もあります。しかし、批判・不満を鬱積したままにしておくのは今後の研究意欲に影響するので、方法を考える価値は有るように思われます。他の分野の場合と異なり、エイズの分野では人材に限られており、現役の研究者を除いてしまうと、評価できる人が少数しか残っていないのが現状です。それと研究分野が基礎研究、臨床研究、社会医学研究と大変広く、他の分野の評価とはかなり事情が異なっております。

私の「企画と評価に関する研究班」も3年目の区切りになります。この前お話ししましたように、主任研究者はどなたかに替わって頂きたいのですが、その際、今回のご意見にありましたように「企画と評価に関する研究班」に基礎研究、臨床研究、社会医学研究のサブグループを設けて、それぞれ責任を持って企画・指導・評価をする体制とするのか等の点も考慮してみる価値は有るように思います。

現在、「企画と評価に関する研究班」は一人のみの研究班ですが、これに基礎研究、臨床研究、社会医学研究のサブグループを設けて各グループ数名の分担研究者あるいは研究協力者を置き、研究課題の企画提案や評価方法のルール作りを担って貰う、各グループの責任者各一名が評価委員に加わる（自分の班の評価は行わない）と言った折衷案なども考えられると思います。

これらのことを来年度の公募課題を考える際の、参考にして頂けると幸いです。

木村 哲

厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業
平成 20 年度 研究成果発表会
プログラム

日時) 1 日目 平成 21 年 2 月 19 日(木) 9:00—18:50

2 日目 平成 21 年 2 月 20 日(金) 9:00—15:35

場所) 東京通信病院 管理棟 7 階 大講堂

東京都千代田区富士見 2-14-23

電話:03(5214)7000

エイズ対策研究事業の企画と評価に関する研究

研究代表者:木村 哲

事務局:〒102-8798 東京都千代田区富士見 2-14-23

東京通信病院 病院長室 山本暖子

TEL: 03-5214-7000 FAX:03-5214-7600

E-mail: hayamamoto@tth-japanpost.jp

平成 20 年度 エイズ対策研究事業 研究成果発表会 プログラム

1 日目 2 月 19 日(木)

9:00~ 9:10	挨拶	倉田毅、木村哲、厚生労働省健康局疾病対策課	
	研究代表者名	課 題 名	研究期間
(1)	9:10~ 9:30 小池 剛一	UNGASS REPORT 等の報告書作成に必要な情報を収集・分析する研究	20~21
(2)	9:30~ 9:50 山本 太郎	先進諸国を中心とした海外におけるエイズ発生動向、調査体制、対策の分析	19~21
(3)	9:50~10:10 武部 豊	アジア・太平洋地域における HIV・エイズの流行・対策状況と日本への波及に関する研究	18~20
(4)	10:10~10:30 木原 正博	HIV 感染症の動向と影響及び政策のモニタリングに関する研究	18~20
(5)	10:30~10:50 山本 直樹	HIV の感染予防に関する研究	18~20
(6)	10:50~11:05 袴田 航	抗エイズ薬を目指したウイルス糖鎖構造制御による宿主免疫の賦活化・機能化分子の開発	18~20
(7)	11:05~11:20 佐藤 義則	HIV 感染モデルマウスの樹立および HIV 特異的細胞傷害性 T 細胞によるエイズ発症遅延機序の解析	20~22
(8)	11:20~11:35 吉岡 靖雄	HIV に対する粘膜ワクチンの最適化に適用安全性・有効性に優れた粘膜ワクチンアジュバントの開発	19~21
(9)	11:35~11:55 廣井 隆親	HIV 感染予防における経粘膜ワクチンの開発	18~20
(10)	11:55~12:15 滝口 雅文	HIV 感染症の治療開発に関する研究	18~20
(11)	12:15~12:35 田邊 嘉也	HAART の長期的副作用対策・長期予後に関する研究	19~21
	12:35~13:10	昼食	
(12)	13:10~13:25 張 隆峰	HIV-1 感染のヒトラット種間バリアーの解明	19~21
(13)	13:25~13:45 佐多 徹太郎	HIV 感染とエイズ発症の阻止および治療に関わる基礎研究	18~20
(14)	13:45~14:00 野村 渉	エイズ感染細胞での配列特異的遺伝子組み換えによる効率的な HIV 遺伝子除去法の開発	20~22
(15)	14:00~14:15 駒野 淳	電算機的アプローチを活用した RNaseH 活性を標的とする HIV-1 複製阻害剤開発に関する研究	18~20
(16)	14:15~14:35 杉浦 互	薬剤耐性 HIV の動向把握のための調査体制確立及びその対策に関する研究	19~21
(17)	14:35~14:55 佐藤 裕徳	薬剤耐性 HIV の発生機序とその制御方法に関する研究	19~21
(18)	14:55~15:10 川下 理日人	多剤耐性 HIV における将来的な変異・構造予測と新規抗 HIV 薬開発	19~21
(19)	15:10~15:30 高折 晃史	Vif/APOBEC3G の相互作用を標的とした新規抗 HIV-1 薬の開発	20~22
(20)	15:30~15:45 武田 哲	抗ウイルス作用をもつ宿主防御因子 APOBEC3G と HIV-1 Vif との結合領域および特性の解明と、その阻害化合物の探索	19~21
(21)	15:45~16:05 市川 誠一	男性同性間の HIV 感染対策とその介入効果に関する研究	20~22
(22)	16:05~16:20 嶋田 憲司	同性愛者等への有効な予防介入プログラムの普及に関する研究	18~20
(23)	16:20~16:35 加藤 慶	沖縄県における男性同性愛者への HIV 感染予防介入に関する研究	20~22
(24)	16:35~16:55 東 優子	日本の性娯楽施設・産業に係わる人々への支援・予防対策の開発に関する学術的研究	18~20
(25)	16:55~17:15 木原 雅子	若年者等における HIV 感染症の性感染症予防に関する学術的研究	18~20
(26)	17:15~17:30 日高 康晴	インターネット利用層への行動科学的 HIV 予防介入とモニタリングに関する研究	20~22
(27)	17:30~17:50 生島 嗣	地域における HIV 陽性者等支援のための研究	20~22
(28)	17:50~18:10 湯永 博之	抗 HIV 薬の適正使用と効果・毒性に関する基礎的研究	20~22
(29)	18:10~18:30 仲尾 唯治	個別施策層に対する HIV 感染予防対策とその介入効果の評価に関わる研究	19~21
(30)	18:30~18:50 服部 健司	HIV 感染予防個別施策層における予防情報アクセスに関する研究	20~22

平成 20 年度 エイズ対策研究事業 研究成果発表会 プログラム

2 日目 2 月 20 日(金)

9:00- 9:10		挨拶	意田毅、木村哲、厚生労働省健康局疾病対策課	
		研究代表者名	課 題 名	研究期間
(31)	9:10- 9:30	濱口 元洋	HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究	20-21
(32)	9:30- 9:50	菊池 嘉	HIV 診療支援ネットワークを活用した診療連携の利活用に関する研究	20-22
(33)	9:50-10:10	金田 次弘	末梢 CD4 陽性 T リンパ球中の残存プロウイルス量とその活動指数は治療中断の指標となりうるかを明らかにする研究	18-20
(34)	10:10-10:30	五十嵐 樹彦	エイズ多剤併用療法中のリザーバーの特定および選択的障害に関する研究	20-22
(35)	10:30-10:50	安岡 彰	重篤な日和見感染症の早期発見と最適治療に関する研究	18-20
(36)	10:50-11:10	中川 正法	NeuroAIDS の発症病態と治療法の開発を目指した長期フォローアップ体制の構築	18-20
(37)	11:10-11:25	高島 康弘	免疫不全に伴う脳内潜伏トキソプラズマ原虫再活性化の事前予想と再活性化原発局所における宿主遺伝子発現レベルの網羅的解析	18-20
(38)	11:25-11:45	岡田 誠治	HAART の長期予後を脅かす治療抵抗性エイズリンパ腫に対する多面的治療戦略開発に関する研究	19-21
(39)	11:45-12:05	小池 和彦	HIV 感染症に合併する各種疾病に関する研究	18-20
(40)	12:05-12:25	坂田 洋一	血友病の治療とその合併症の克服に関する研究	18-20
12:25-13:00		昼食		
(41)	13:00-13:20	白阪 琢磨	服薬アドヒアランスの向上・維持に関する研究	18-20
(42)	13:20-13:40	白阪 琢磨	自立困難な HIV 陽性者のケア・医療に関する研究	19-21
(43)	13:40-14:00	山中 京子	中核拠点病院において行われるカウンセリングの質を向上させる研究	20-21
(44)	14:00-14:20	秋田 定伯	HIV 関連 Lipodystrophy の克服に向けて	20-22
(45)	14:20-14:40	佐藤 岳哉	AZT 誘発ミトコンドリア機能障害に対する分子治療方法の開発	19-21
(46)	14:40-14:55	渡邊 大	標準的治療法の確立を目指した急性 HIV 感染症の病態解析	20-22
(47)	14:55-15:15	和田 裕一	周産期・小児・生殖医療における HIV 感染対策に関する集学的研究	18-20
(48)	15:15-15:35	今井 光信	HIV 検査相談機会の拡大と質的充実に関する研究	18-20

※ 一般・指定研究 発表時間 15分、質疑応答 5分

※ 若手研究 発表時間 10分、質疑応答 5分